

## 文献紹介

長谷部弘・高橋基泰・山内 太 編

『近世日本の地域社会と共同性

—近世上田領上塩尻村の総合研究 I—』

刀水書房 2009年3月 280頁 6,000円+税

本書は、近世後期の一村落に関する経済史の研究を中心とした共同研究の成果である。事例とされた上塩尻村は、現在の長野県上田市大字上塩尻にあたり、近世後期から近代にかけて、蚕種業で栄えた村として知られている。しかし本書は、蚕種村の単なるモノグラフとして意図されているわけではない。実に膨大な八つの家文書と区有文書を総合的に分析し、村落共同体と家という古典的な概念を再考することが、編者らの目指す方向である。

村落と家は、近世日本の歴史地理学においても基本的な概念である。とりわけ、村落内の地縁的な小集団は、古典的な論点となってきた。とはいえ、多くの場合、この村落と家という二つの概念は研究の大前提であって、それ自体が詳細な検討の対象となることは少なかった。しかし、本書の重層的な史料分析を前にすれば、少数の史料から村落や家や地縁的小集団を安易に認定することに、躊躇を覚えることになる。社会地理学的あるいは歴史人口学的視点から近世村落にアプローチする歴史地理学者は、本書の主張に耳を傾ける必要があるだろう。

以下、おおよその目次構成を示した上で、内容を紹介しつつ、若干の論評を加えていきたい。

はじめに (長谷部・高橋・山内)

第1章 上塩尻村の地理的特徴と耕地利用

1 上塩尻村の地理的特徴 (村山良之)

2 耕地と自然災害 (山内)

第2章 藩政と村落支配行政

1 上田藩の郷方支配と村 (長谷部)

2 「村」の機能 (長谷部)

3 年貢の賦課と徴収 (山内)

4 治水をめぐる藩と村 (長谷部)

第3章 居住・生業・共同性

1 木戸は取り払われたのに (田島 昇)

2 蚕種業の展開と住居建築の変容 (Martin N. Morris)

第4章 上塩尻の人口動態 (高橋)

第5章 家と相続

1 家族と家系 (高橋)

2 家と相続 (高橋)

3 家業・家産・家名の継承と相続 (長谷部)

あとがき (高橋)

序論にあたる章がなく、本書の意図と構成上のねらいが十分に説明されていない憾みはあるが、編者らによる「はじめに」が、近世から近代への推移を見据えた問題意識を簡略に述べている。「共同体の解体と近代的個人の形成」といった古典的で大きな理論から歴史を説明してしまうことへの違和感が表明される一方、共同的な諸関係が解体と組織化を繰り返し、無数の社会関係が複雑にからまる共同性の諸相を捉えるという野心的な意図が示唆されている。

ちなみに、具体的な学史整理を踏まえた問題提起としては、編者の一人長谷部氏が日本村落社会研究学会(2007年)の大会テーマセッション「近世村落社会の共同性を再考する」で示された序論がある<sup>1)</sup>。そこで指摘されている3つの論点、すなわち、①藩政村と「村落共同体」を同一視しがちな発想の見直し、②歴史的資料自体の社会的・歴史的な性格や体系性の再考、③歴史人口学的な知見と共同性の議論との総合化は、ほぼ本書の序論として読むことができる。

さて、本書の内容に戻ろう。まず第1章では、千曲川の河岸に位置する事例村・上塩尻の微地形と土地利用の連関、ならびに村における水害常襲地の所有の扱いが検討される。被害を受けやすい農地は、上層の家々の恒常的な所有地となることはなく、頻繁な所有の移動を繰り返す。ただし災害の完全な回避は困難とする近世的な理解のなかでは、水害常襲地の存在はやむをえない犠牲であり、その籤による再配分や辞退者への代金の支給は、水害に対する村落的共同性の表れとして位置づけられている。なお、微地形の分析は地理学の村山氏によって為されており、地籍図がGISを

通じて有効に活用されている。

第2章では、まず第1節・2節において、村落支配行政と村内の共同体的な諸相との関係が検討される。親族集団を捉えた宗門改帳記載の「家」と、近世後期に同族組織から隣保集団へと変化した五人組を構成する「家」の差違が検討される。そして市場経済化を背景とする家経営の自立性の高まりとともに、村内行政も五人組の代表を含む「寄合」で運営されることとなる。史料の作成意図によって、また時期によって、家・家連合・村それぞれの共同性の有り様も、異なった姿を見せることが示されている。一方、第3節・4節では、領主に対する村落のあり方として、年貢徴収と川除普請が検討されている。年間を通じて村落は農民に年貢を割り当てていたが、農民からの納付には様々な形があり、未納者を見越した形で年貢が多めに確保されたとの推測は興味深い。

続く第3章のうち、第1節は村内のある争論とその解決を素材として、村内行政のあり方を捉えている。前章でも焦点となった「寄合」の特色が浮き彫りになっている。対して第2節は、2階に養蚕専用の空間をもつ当地域に特徴的な住居建築の形成が、近世後期に進んだことを論じている。ただし、本章は一つの章として構成された意図が読み取りにくく、生業と共同性の連関が焦点となっているわけでもない。1節は2章と、2節は1章と、むしろ関わっているようにも見える。また、生業と村落共同体を強く結びつける二つの焦点、すなわち入会林野と灌漑水利の管理に関して、本書全体を通じてまとまった検討が為されていないことは、気になる課題である。

さて、残る第4章・第5章では、宗門改帳データベースに基づく歴史人口学的検討が展開されている。しかしその内容は、宗門改帳の常套的な分析手法への異議申し立てを強く意識したものである。特に、宗門改帳の記載単位を「世帯」ないし「家」として統計的に処理することが、家の結びつきや形成という共同性の諸相を取り出すことに必ずしも繋がらないことが、編者らの強い問題意識となっている。第4章では、歴史人口学データの基礎的な分析が為される一方、近世後期に村のまとまりが同族集団から分家の公式的な分割へと弛緩することが宗門改帳から導かれる。ただし、統計的に処理される「世帯」が家の実態からは乖

離している可能性が保留され、その指摘は続く第5章で改めて検討される。

第5章の検討の大きな武器となっているのが、まとまった量で残されていた家系図群である。家系図の示す家と宗門改帳の示す家には、資料作成の意図の違いに起因する質的な差違が認められる。宗門改帳の記録がより公的な家族であるとすれば、家系図は内々の家族を示すものだといえる。相続や分家という営みは、単一の理解のみで位置づけられる出来事ではなく、改帳における世帯筆頭者の交替、改帳に表れない分家、さらに家名や家産の相続という諸相のなかで、必ずしも一致しないまま進展していたことが如実に示されている。この議論は、宗門改帳の性格を改めて認識させてくれるとともに、家や家連合という共同性に様々なレベルがあり決して一義的に認定できないこと、そして現実の村のなかでは共同性の契機が重層的に複雑にからまって進展することを、想像させてくれるのである。

以上の5章を以て本書は締めくくられている。結論的な章は置かれていないものの、本書が意図する村落共同体の再考が、この概念の単純な否定でも復活でもないことは明白である。むしろ、一つの村の内と外で、様々な人や家の結びつきが形成・維持・衰退を重ねていくという当たり前の事実気づかせてくれる。近世初頭に政治的に設定された藩政村という枠組みも、その結びつきの最も重要な一つに過ぎず、家というまとまりも一つの決定的な定義で理解できるものでない。

家を構成要素とする村落共同体という古典的概念は、演繹的に指定されるがために、えてして現実の研究のなかでは使いづらい。史料を丁寧に読めば読むほど、この硬い概念が単なるアイデアに過ぎないことを実感し、かえって忌避する研究者が多いのではなからうか。しかしながら近世日本の地域社会にアプローチするためには、とりあえず「村」と「家」という枠組みを指定せずには分析に入ることさえできない。本書の「はじめに」では、共同体的な諸関係に関心を払わない経済史への違和感や危機感がほのめかされているが、同時に、大きな概念でもって説明してしまうことへの躊躇も表明されている。本書の共同研究の端緒は、編者の一人長谷部氏が一つの家文書の調査に着手した1991年に遡るという。上記の見識が、分

厚い史料調査と共同研究のなかから生まれたことに、敬意を表したい。

なお本書は書名に「総合研究Ⅰ」とあるように、当上塩尻村の研究は完結したわけではなく、続巻が予定されている。とくに方法論（対比研究）および蚕種業の展開と経済市場化については、第

二巻以降で扱われることが予告されている。さらなる議論の展開を期待したい。

（米家泰作）

〔注〕

- 1) 長谷部弘「村落的共同性を再考する」, 年報村落社会研究44, 2009, 9～36頁。